第４章　遺構

常安王神の森遺跡の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡、配石、埋甕、柱列、土坑・ピットなどである。なお、各遺構から出土した遺物の詳細については、第５章において包含層遺物とともに紹介しているので、あわせて参考とされたい。

Ⅰ　竪穴住居跡　〔図版第二（３）～四（４）〕

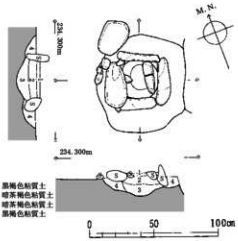
竪穴住居跡は総数で７棟を設定した。以下、各住居跡について記述する。

（１）１号住居跡

A15区で石囲い炉のみ検出した（第７図）。竪穴住居跡本体は、黒色包含層中で構築されたものと見られ、明瞭なプランを検出し得なかった。したがって、今回１号住居跡出土とした遺物については、炉およびその周辺、すなわち住居と推定される範囲内より出土したものと解釈されたい。

石囲い炉は扁平もしくは方柱状の川原石を方形に組んだもので、一辺は約50cmを測る。炉を囲む石は基本的に縦置きにされるが、西側の石のみ平置きにされる。炉床は地床で、炉内には黒褐色土の堆積が認められた。掘り方は直径約70cmほどの扁円形を呈し、中央は一段やや低く掘り込まれていた。

遺物は、縄文式土器（中期末主体）、打製石斧２点、磨石11点、石皿３点、石錘１点が出土した。



第７図　１号住居跡炉実測図（縮尺１/30）

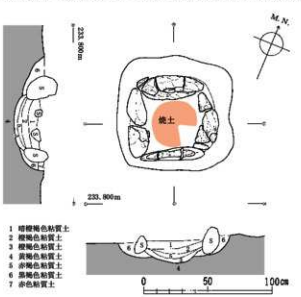
（２）２～５号住居跡

A・B12～14区で各々に切り合った状態で検出した（第12・13図）。なお、これら住居跡の区分は調査の進捗順に設定されたため、各々の区割は非常に近接しており、結果として相互に重複していた部分も少なくない（第14図）。したがって、特に２・４・５号住居跡出土遺物については、当初から出土地を厳密に峻別し得たわけではなく、相互に重複する部分が少なからず存在することをまず断っておく。

２号住居跡　竪穴の床面・石囲い炉・柱穴などを検出した。床面は著しく赤化しており、火災を被った可能性を指摘出来よう。

石囲い炉は方柱状の川原石を方形に縦置きにしたもので、一辺は約70cmを測る（第８図）。炉石の上部は被熱して表面の一部が赤化・劣化している。炉床は地床で、炉内には黒褐色土および被熱して硬化した赤褐色焼土の堆積が認められた。炉の掘り方は一辺約90cmの方形を呈し、中央部はさらに一段やや低く掘り込まれていた。

竪穴の壁は３～５号住居跡および周囲の遺構によ



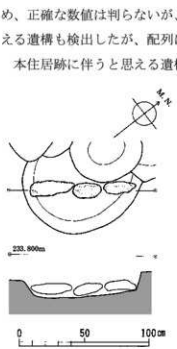
第８図　２号住居跡炉実測図（縮尺１/30）

り全て切り取られているので、竪穴の正確なプランは判らないが、炉を基準として住居の主軸を設定した場合、Ｐ１－Ｐ12－Ｐ７－Ｐ３という五角形の柱穴配列が推定出来る（第13図）。この場合、柱穴はいずれも略円形あるいは楕円形で、径は40～50㎝、深さは30～50㎝を測る。

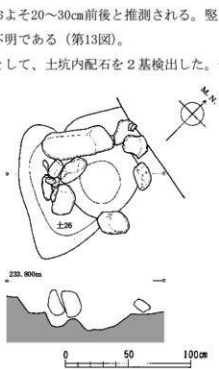
遺物は縄文式土器（中期後葉主体）、打製石斧２点、磨石54点、石皿３点、石錘１点が出土した。

３号住居跡　竪穴、柱穴などを検出した。検出した竪穴は南半部のみで、全体形は円形とも隅丸方形とも推定出来るが、規模同様に断定するのは難しい。壁高はやはり周囲の遺構との切り合いが激しいため、正確な数値は判らないが、およそ20～30㎝前後と推測される。竪穴内にはＰ２やＰ７など柱穴と思える遺構も検出したが、配列は不明である（第13図）。

本住居跡に伴うと思える遺構として、土坑内配石を２基検出した。一つは長細い礫を３つ直線的に配置したもので、東側壁面側のＰ１内に構築される（第９図）。もう一つは西側壁面側のＰ８を囲む様に大小様々の礫がやや乱雑に配される（第10図）。



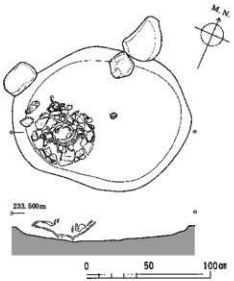
第９図　３号住居跡Ｐ１実測図
（縮尺１/30）



第10図　３号住居跡Ｐ８実測図
（縮尺１/30）

遺物は縄文式土器（中期後葉主体）、打製石斧４点、磨石30点、石皿１点、石錘１点、石製品１点が出土した。また、石棒１点も出土していたが、残念ながら調査中に盗難に遭い、紛失した。

４号住居跡　竪穴とそれに伴う壁溝、柱穴などを検出した。竪穴の北半部は５号住居跡に切り取られ、全体のプランはほぼ二等辺三角形を呈する。壁溝は竪穴南側の二辺に施され、溝の内部には径60㎝前後、深さ50㎝前後の柱穴が各辺２基ずつ（Ｐ１・２、Ｐ３・４）配置される（第13図）。

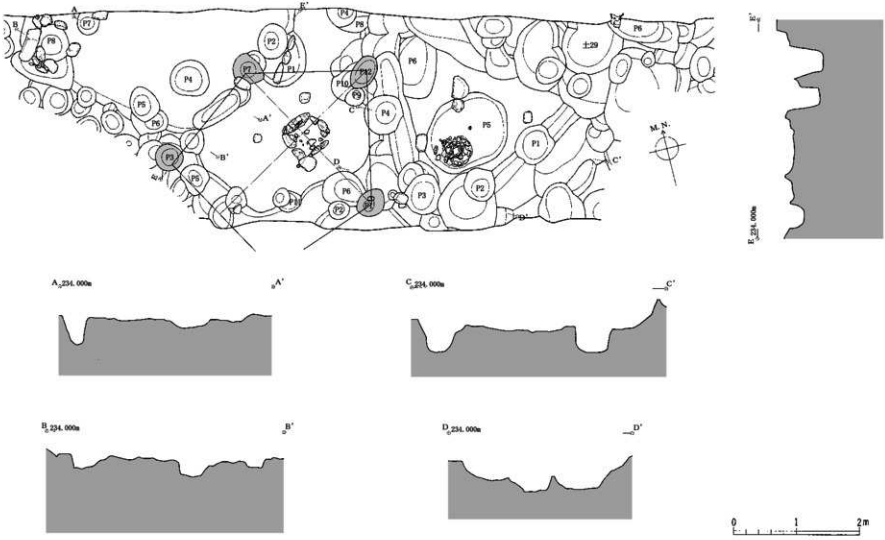


第11図　４号住居跡Ｐ５実測図
（縮尺１/30）

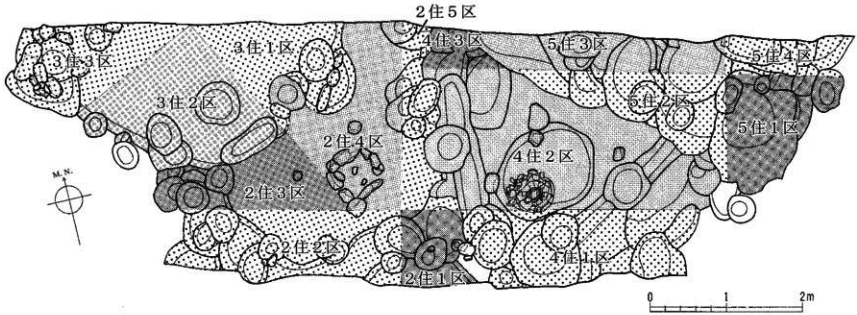
本住居跡に伴う遺構としては、壺形土器（第61図４）を伴うＰ５がある（第11図）。上面形・下面形とも偏楕円形を呈し、上面形規模は長軸約140㎝、短軸約110㎝、下面形規模は長軸約120㎝、短軸約90㎝を測り、深さ約10㎝を有する。壺形土器はＰ５の南西隅に正位に置かれた後、土圧によって上下に押し潰れたものと推測される。

なお、前章でも触れたように、４・５号住居跡とも覆土中に多量の礫が混入していたが、この状況を明確に説明し得る具体的な実証は得られなかった。

遺物は縄文式土器（中期後葉主体）、打製石斧２点、磨石 16点、石皿２点、石錘２点が出土した。



第13図　２～５号住居跡実測図（２）（縮尺１/60）



第14図　2～5号住居跡区割図（縮尺1/50）

５号住居跡　竪穴の一部のみ検出した。検出範囲が非常に狭く、明瞭なプランを確認し得なかった。そのほか、本住居跡に伴う遺構としては、キャリパー形土器（第67図４）を伴うＰ６がある（第15図）。

遺物は縄文式土器（中期後葉主体）、打製石斧２点、磨石21点、石皿４点、石錘１点が出土した。

まとめ　以上、各住居跡の中で、竪穴住居跡と明確に認定し得るのは２号住居跡と３号住居跡であろう。４号住居跡は少なくとも何らかの施設跡とは思えるが、その変則的な形状などを考慮すると、住居というイメージからはやや離れるように思える。５号住居跡は調査当時の経緯上、住居と認定したが、省みれば大いに疑問が残るところである。

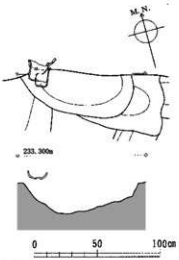
最後に各住居跡の先後関係についてまとめておく。まず、断面図を観察すると、２号住居跡は３・５号住居跡に先行し、４号住居跡は２・５号住居跡に先行することが判る（第35図）。

したがって、各住居跡を古い順に並べると、４号住居跡→２号住居跡→３・５号住居跡の順となる。なお、３号住居跡と５号住居跡は直接切り合っていないので、先後関係を判定することが出来ない。

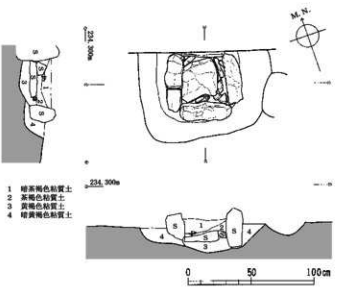
（３）６号住居跡

Ａ・Ｂ15～16区で、壁溝・柱穴・石囲い炉などを伴う竪穴のほぼ南半部を検出したが、最近の攪乱により、竪穴南東部の一隅が破壊されている（第17図）。

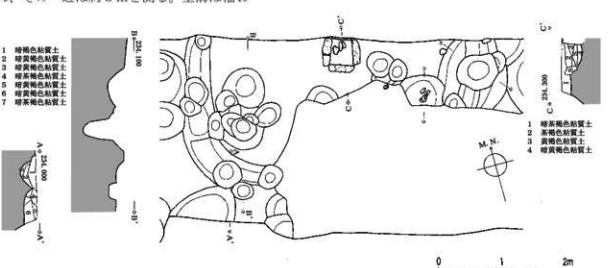
竪穴の形状などから判断して、住居全体のプランは隅丸方形を呈するものと推測され、その一辺は約５ｍを測る。壁溝は幅40



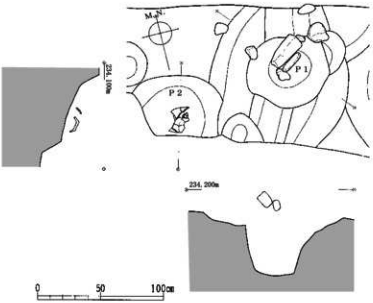
第15図　５号住居跡Ｐ６実測図（縮尺１/30）



第16図　６号住居跡炉実測図（縮尺１/30）



第17図　６号住居跡実測図（縮尺１/60）



第18図　６号住居跡Ｐ１・２実測図（縮尺１/30）

～50㎝、深さ約15㎝前後で、溝内には柱穴と思えるピットも二、三あるが、これらの具体的な配列は判らない。

石囲い炉は方柱状の角礫を縦置きし、略方形に組み合わせたもので、一辺は約60㎝を測る（第16図）。炉床は石敷で、炉内には茶褐色土の堆積が認められた。本遺跡で炉床が石敷なのは、この６号住居跡炉のみである。炉の掘り方はほぼ隅丸方形を呈し、その一辺は約110㎝前後を測る。掘り方の中央部は不明瞭ながらややくぼんでいる。

本住居跡に伴う遺構としては、Ｐ１・２などを検出した（第18図）。Ｐ１は本住居跡に伴う柱穴と推測されるが、上部に位置する石との関係は明である。また、Ｐ２からは土器の底部が出土している。

遺物は縄文土器（中期後葉主体）、磨製石斧１点、磨石８点、石皿１点、石錘１点が出土した。

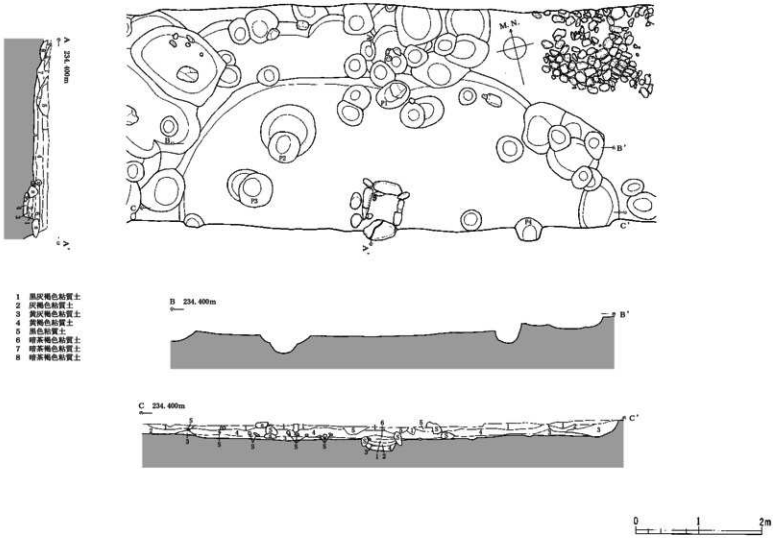
（４）７号住居跡

Ａ・Ｂ19～20区で、石囲い炉・柱穴などを伴う竪穴の北半部を検出した（第20図）。南半部は昭和13年の県道工事時に削平されたものと推測される。全体のプランは円形あるいは隅丸方形を呈するものと思え、最大径は約6.5ｍを測る。柱穴と思えるピットも若干検出したが、竪穴の南半部がすでに失われているので、配列は判然としない。しかし、炉の主軸を基準にした場合、Ｐ３－Ｐ１－Ｐ４という配列が想定出来よう。この場合、柱穴はいずれも径50㎝前後、深さ10～30㎝前後である。

第19図　７号住居跡炉実測図（縮尺１/30）

石囲い炉は扁平・方柱状の川原石を方形に縦置き、または平置きしたもので、一辺約70㎝前後を測る（第19図）。炉を囲む南側の石のみが平置きされ、北側の二隅に小礫が挿し込まれるように配されてるなど、他の住居の炉とは形状面で一線を画する。炉の掘り方は略円形を呈し、径は110㎝前後を測る。炉床は地床で、炉内には茶褐色土および暗橙褐色土の堆積が認められ、若干の赤褐色土（焼土）面も検出した。掘り方の中央はやや掘りくぼむ。

遺物は縄文式土器（中期後葉主体）、磨製石斧１点、打製石斧１点、磨石25点、石皿４点、石錘４点が出土した。



第20図　7号住居跡実測図（縮尺1/60）

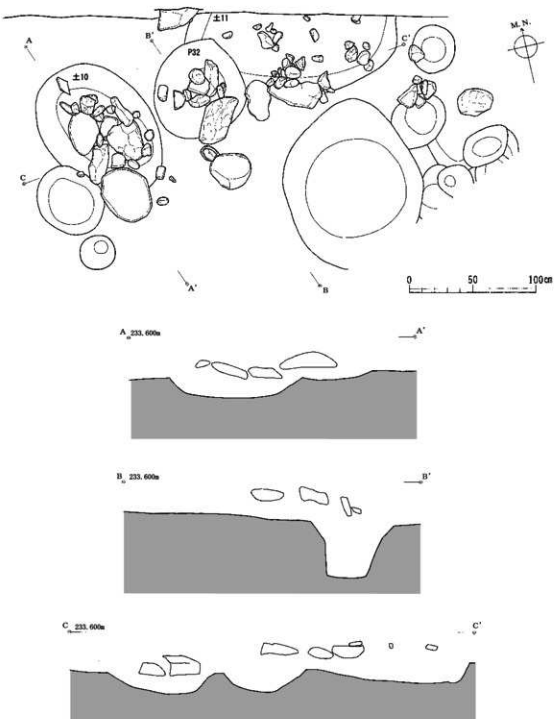
Ⅱ　配石　〔図版第五（１）～（４）〕

配石は総数で４基検出した。用いられた石は主に足羽川の川原石であろうと思える。

（１）配石１

Ａ・Ｂ６～７区の黒色包含層中で検出した（第21図）。なお、現地調査中、配石中の大型石皿１点が盗難に遭い、実測作業はその石皿を欠いた状態で行わざるを得なかった。

配石は土坑10上面と土坑11・Ｐ32上面の二つのまとまりに大別され、それぞれの遺構に伴うものと思



第21図　配石１実測図（縮尺１/30）

えるが、検出面が黒色包含層中であったため、明瞭な掘り方や断面を検出し得なかった。

配石の構造はいずれも大型の扁平な川原石を主として、大小様々な石を雑多に寄せ集めており、石の配置自体にも特に規則性は見て取れない。

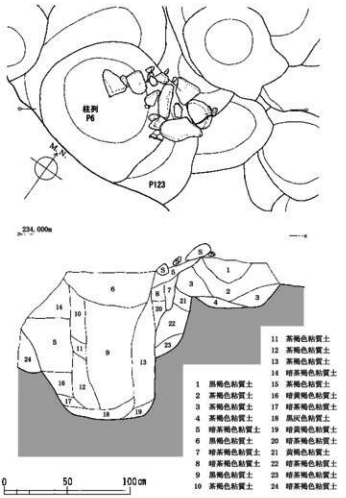
遺物は縄文式土器（中期後葉主体）、石錘１点が出土した。

（２）配石２

Ｂ９区の黒色包含層中で検出した（第22図）。Ｐ123および柱列Ｐ６付近に位置するが、断面等から推測するに、元はＰ123に伴っていた配石が、柱列Ｐ６が掘られた際に一部破壊された状況を呈しているものと思える。柱列Ｐ６の上面に礫が若干散っているのもそのためであろう。

構造は配石１と同様、大小様々な川原石が雑多に寄せ集めているだけだが、上記のように現状がすでに一部破壊されているような状況ならば、これ以上の検討は難しい。

遺物は縄文式土器（中期後葉～後期初頭）が出土した。



第22図　配石２実測図（縮尺１/30）

（３）配石３

Ａ・Ｂ18～19区の黒色包含層と黄褐色地山層との漸移層（黒褐色土）上面で検出した（第24図）。

大小様々な石が分布するが、おおむね二つのまとまりに大別されると思える。すなわち、全長30～40㎝あまりの大きな河原石に限定するならば、Ｐ307上部およびその北寄りに隣接するピット上部の２ヶ所に石の密集がそれぞれ見て取れる。

その２ヶ所の密集の間に石の比較的まばらな部分があるが、この空白を対称軸と見るならば、軸を挟んで、歪ながら左右放射状に石を配置しているように見受けられる。つまり、配石３は左右対称構造を成していると思えるのである。この場合、配石３の主軸はＮ－44°－Ｗを向き、その規模は北西－南東に約100㎝、北東－南西に約250㎝の範囲に及ぶと見られる。

なお、検出面がほぼ黒褐色土であったため、掘り方・断面等からは下部遺構との明瞭な関係を導き出すことが出来なかったが、上記のように配石３が左右対称構造を有すると見なすならば、下部遺構は配石を構築するための単なる掘り方と理解すべきであろう。

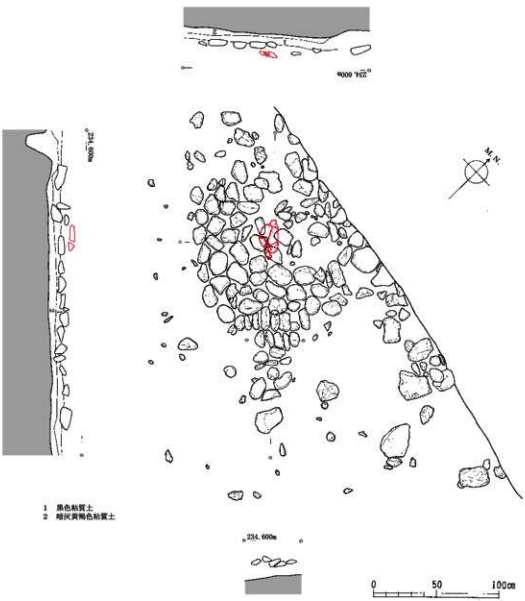
この配石３の周辺およびＰ307などの下部遺構から遺物は出土しなかった。

（４）配石４

配石３と同じく、A20区の黒色包含層と黄褐色地山層との漸移層上面で検出した（第23図）。主軸はN－46°－Wに向けており、前述した配石３の主軸の向きとほぼ一致する。

全体形はいわゆる柄鏡形を呈し、鏡部はほぼ正方形に近く、一辺は約120cmを測る。柄部は長さ約80cm、幅約30cmを測る。後世の攪乱のためか、鏡部の北東部の一隅が崩れて、礫が散っている。鏡部・柄部とも、川原石の大きさをある程度選んで用いている傾向がうかがえ、特に柄部自体は石の配置がまばらな部分もあるが、鏡部と接する付け根の部分には大きさの揃った細長い川原石を規則正しく配置しており、製作者の丹念な意図が見て取れる。また、鏡部中央付近のやや上面で、被熱して割れたと見られる石を検出した（同図赤線部）が、配石を直接構成する石ではないと思え、周辺の石にも被熱した様子は特にうかがえなかった。

配石の下部には明確な掘り方を検出し得なかったが、黒褐色漸移層中で遺構が完結していたのか、あるいは単に平地に石を配しただけなのかは判然としない。また、この配石４から遺物は出土しなかった。



第23図　配石４実測図（縮尺１/30）

Ⅲ　埋甕　〔図版第六（1）～（4）〕

埋甕はA・B15区において、総数で３基検出した。全て黒色包含層中に構築される。

（1）埋甕１

A15区で検出し、１号住居跡炉と切り合っている（第25図）。ともに黒色土を掘り込んだ遺構のため、断面観察からは先後関係を明らかにし得なかった。掘り方の全体形や規模は直ちに断定出来ないが、上面形・下面形とも楕円形を呈するものと思える。深さは約30cm程であろう。

埋甕は正位に埋められ、扁平な礫で蓋をされていたものと思える（第26図）。所属時期は縄文中期末で、１号住居跡炉出土の土器片が一片のみ接合している（第51図５で１号住居跡出土土器と共に掲載）。

今回は１号住居跡炉と埋甕１をそれぞれ個別の遺構として扱ったが、遺構が近接することや出土土器が接合したことを考慮すると、埋甕１が１号住居跡に伴っていた可能性は高いと思える。

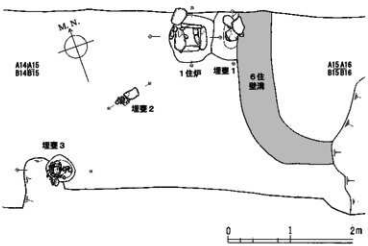
（2）埋甕２

B15区で検出し、１号住居跡炉の１ｍほど西方に位置する（第25図）。土器が正位に埋められたと思えるが、全個体の１／４以下が残存するにとどまる（第26図）。また、脇に扁平な礫があったが、これが埋甕の蓋かは不明である。掘り方は黒色包含層中で完結していたため、明確には検出し得なかったが、包含層の厚さや出土状況などから推定するならば、深さ20～30cm前後の小規模なものと思える。

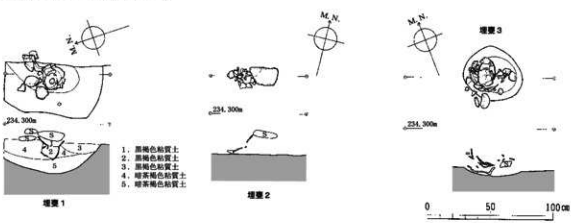
（3）埋甕３

B15区で検出し、埋甕２のさらに1.5ｍほど西方に位置する（第25図）。無文の深鉢形土器（第76図４）が正位に埋められ、押し潰れていた（第26図）。この土器の所属時期は不明である。また、周辺に蓋となりそうな礫は無かった。

掘り方は略円形を呈するが、これは地山面で確認出来たもので、実際の掘り方とは形状も規模も当然異なるであろう。状況から判断するに、少なくとも最大径50cm以上、深さ20cm以上の掘り方を有するものと推測される。



第25図　１号住居跡炉・埋甕１～３実測図（縮尺１/60）



第26図　埋甕１～３実測図（縮尺１/30）

Ⅳ　柱列

Ａ・Ｂ９区で検出した（第28図）。列を構成すると思える主柱穴は８基あり、その数および配列形状から、二つの柱列が見て取れる。すなわち、第一列に伴う主柱穴としてＰ２－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ７の４基が、第二列に伴う主柱穴としてＰ１－Ｐ３－Ｐ６－Ｐ８の４基がそれぞれ想定出来よう。

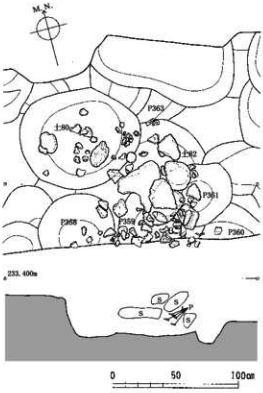
主柱穴はいずれも略円形もしくは略楕円形で、最大径80～140cm、深さ60～140cmを測る。調査区の制約等もあって、全体形状の検出には至らなかったが、主柱穴の配列は多角形もしくは円形を成すものと思え、全体の規模は第一列が半径４ｍ前後、第二列が半径７～８ｍ前後と推測される。つまり、今回検出したのは柱列の南側外郭部分で、中心部も含めた大半は調査区外（北側）に存在すると思える。

遺物は縄文式土器（中期後葉主体）、打製石斧１点が出土した。

Ⅴ　土坑・ピット

土坑やピットは調査区全域にわたって極めて多数を検出したが、遺物が出土したものだけでも、土坑88基、ピット366基を数える。このように遺構が密集し、相互に激しく切り合っている状況では、形状や規模など個々の遺構の属性について、逐一厳密に判断することはほぼ不可能と思える。

ゆえに、土坑・ピットについて全てを網羅するのは避け、特記すべきと思われる１例のみ紹介し、その他については遺構実測図（第29～44図）を付して記述に換えたい。なお、住居跡に伴う柱穴や柱列など一部の例外を除いては、基本的に遺物が出土した遺構についてのみ、遺構№を付している。



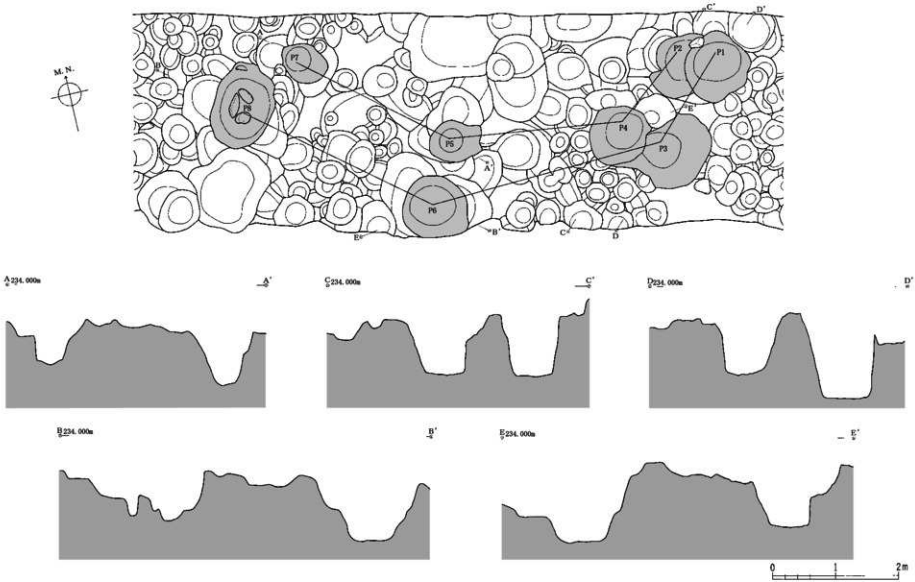
第27図　土坑80・82、Ｐ358～361実測図
（縮尺１/30）

土坑80・82、Ｐ358～361　Ｃ・Ｄ７区で検出した（第27図）。土坑82付近の上面に大型の石が数個寄せ集められ、その集石の下部や周辺から、多くの遺物が出土している。

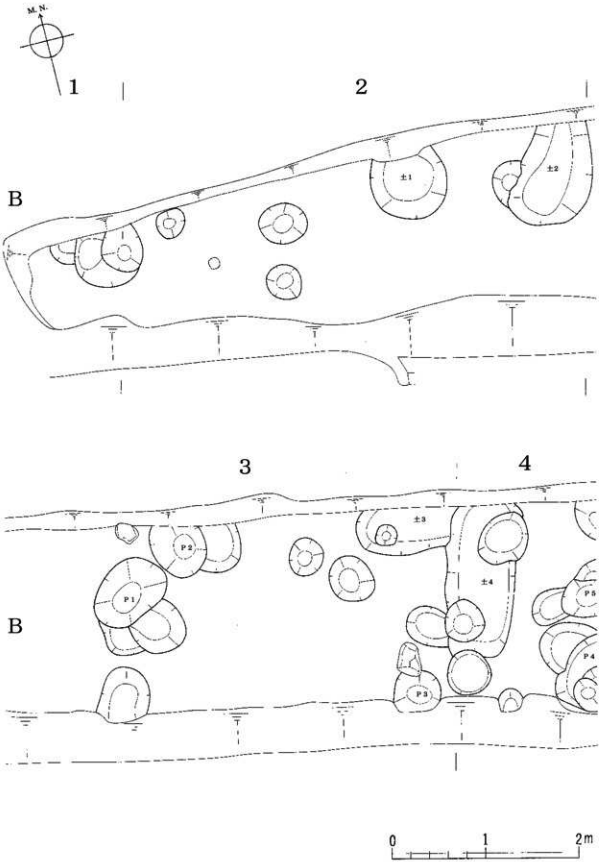
土坑82の形状や規模などは、周囲の遺構に外形を切り取られているため、詳細を知り得る状況にはないが、深さは約30cm前後で、最大長も少なくとも１ｍを超えるものと推測される。

上面に配置された石は川原石と思え、比較的扁平なものが多いが、石の選択や配置そのものに特別な作為は認められない。また、この集石と土坑82との関連も不明である。

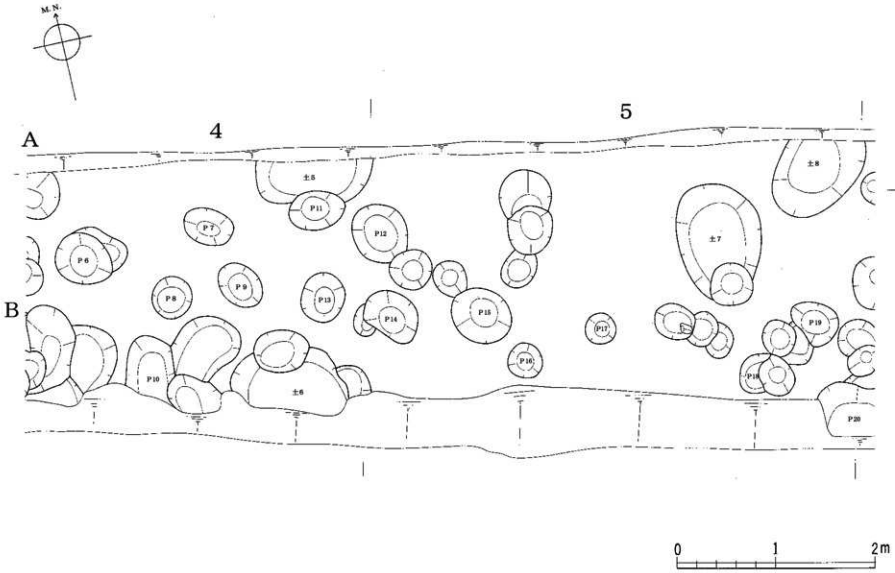
遺物は縄文式土器（中期末主体）が出土した。



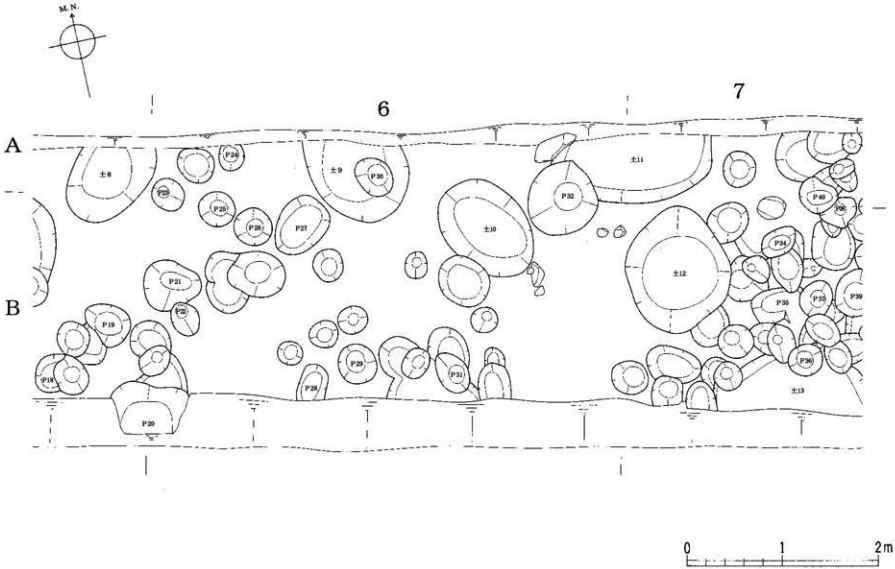
第28図　柱列実測図（縮尺１/60）



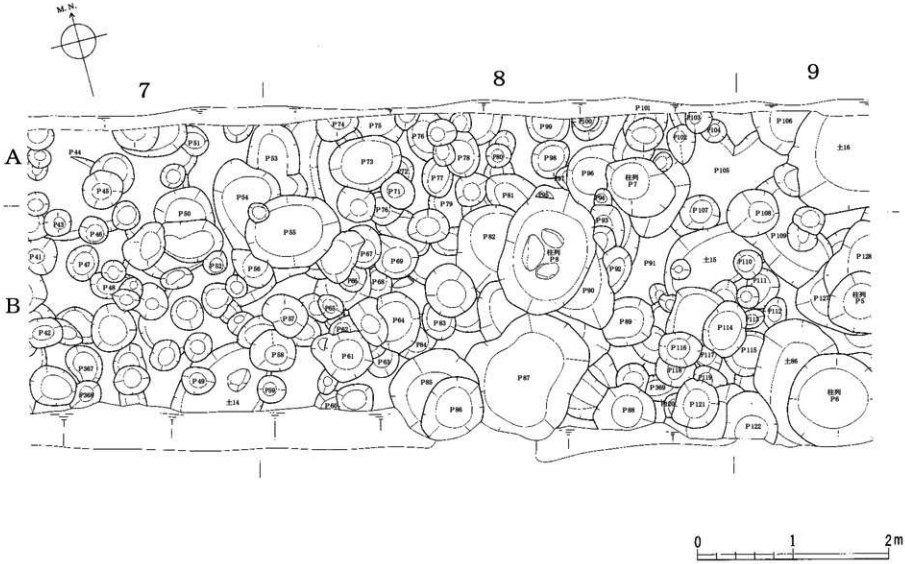
第29図　遺構実測図（１）（縮尺１/40）



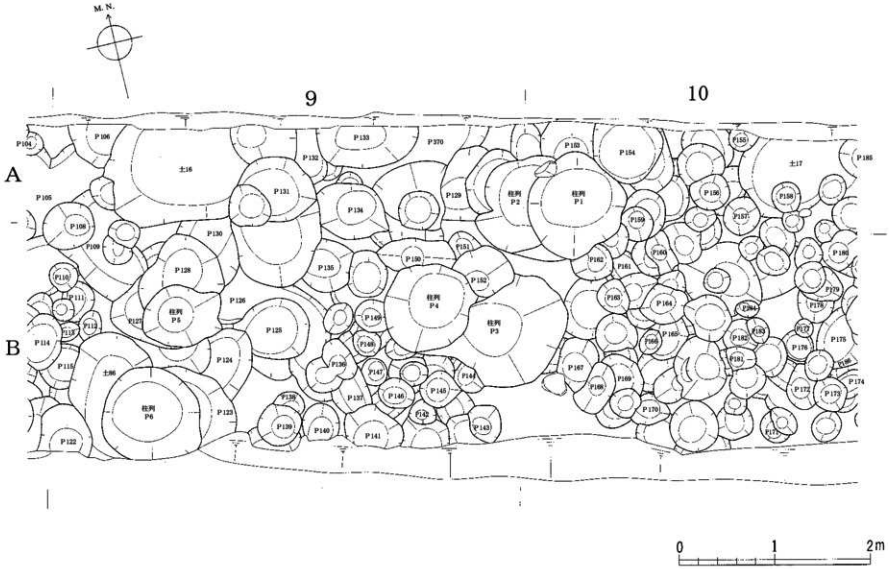
第30図　遺構実測図（２）（縮尺１/40）



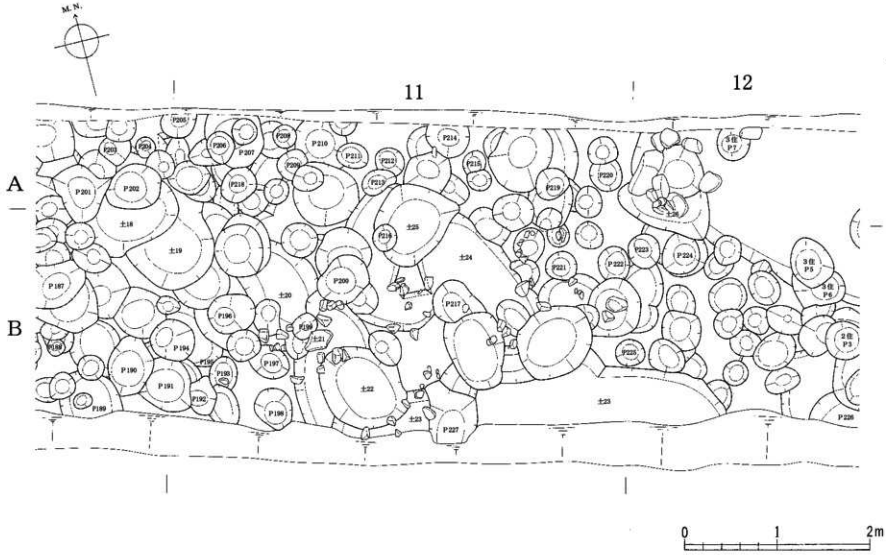
第31図　遺構実測図（3）（縮尺1/40）



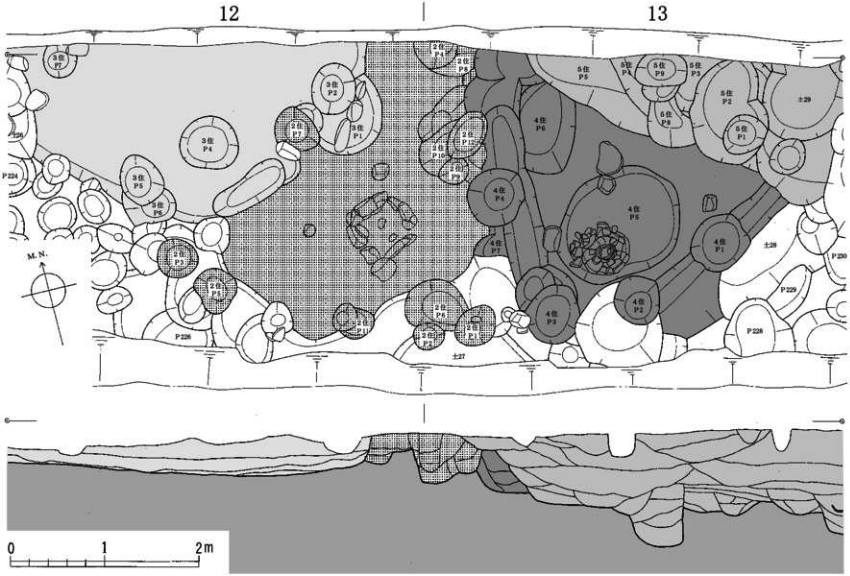
第32図　遺構実測図（4）（縮尺1/40）



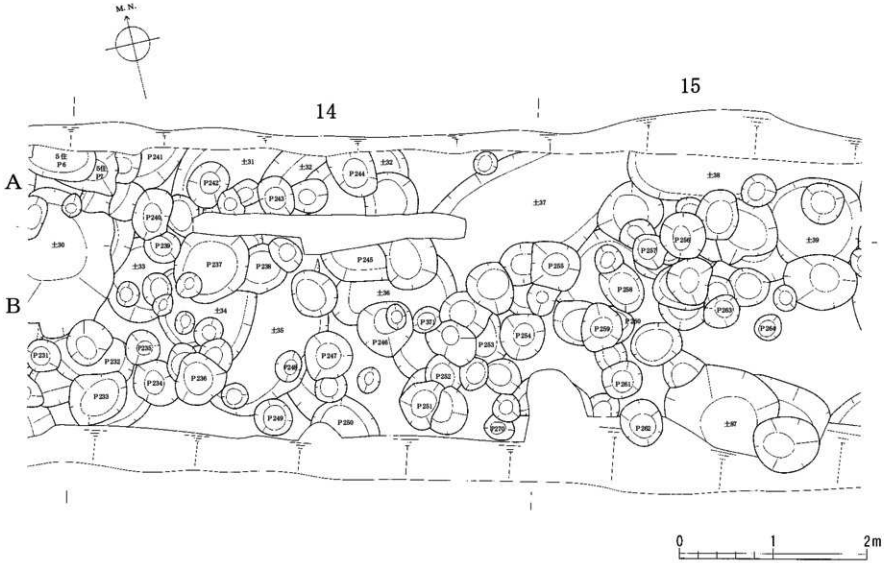
第33図　遺構実測図（5）（縮尺1/40）



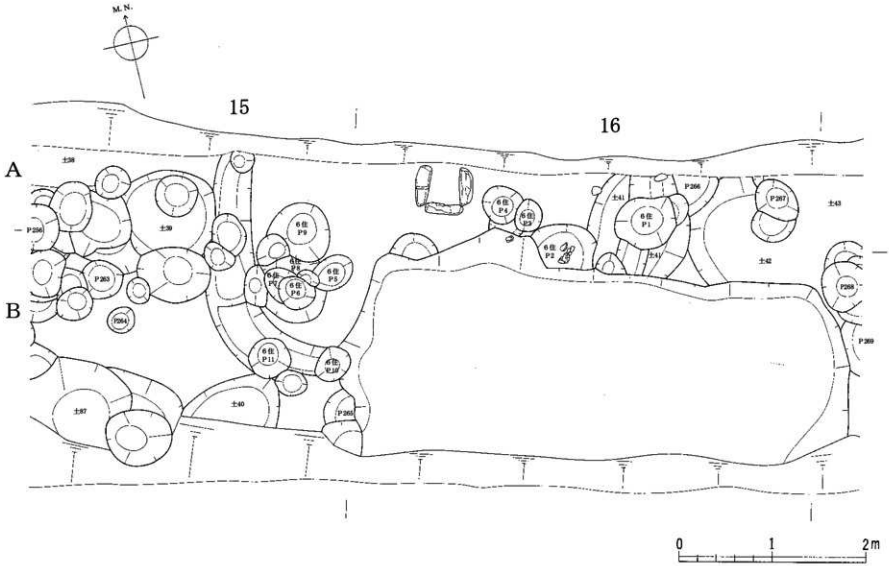
第34図　遺構実測図（6）（縮尺1/40）



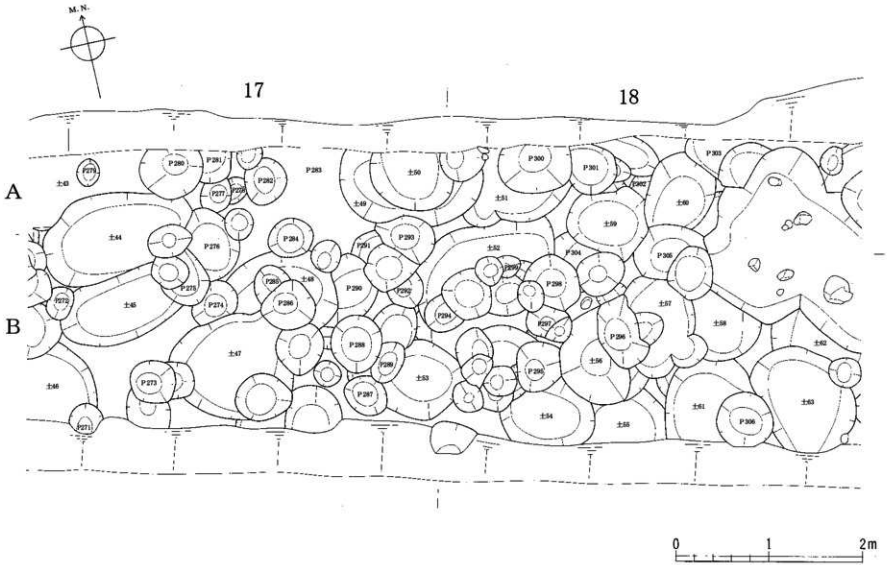
第35図　遺構実測図（7）（縮尺1/40）



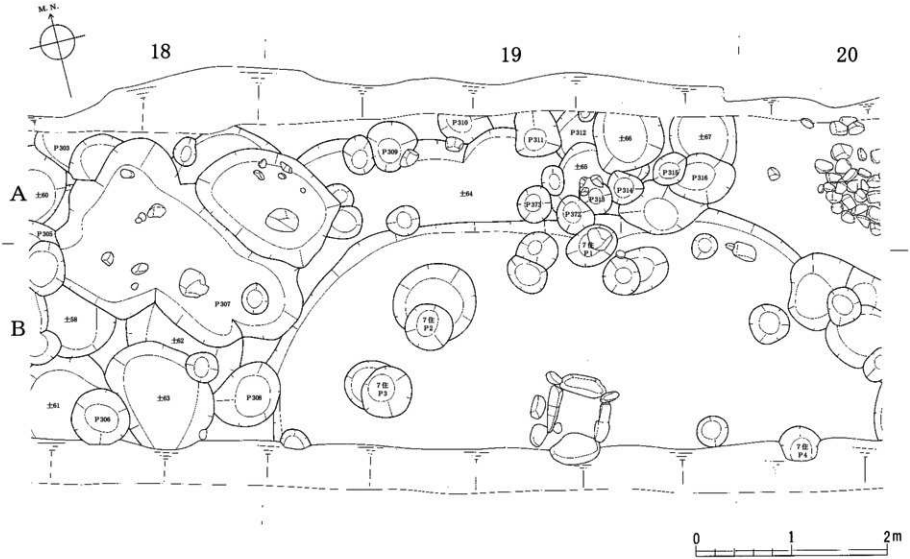
第36図　遺構実測図（８）（縮尺１/40）



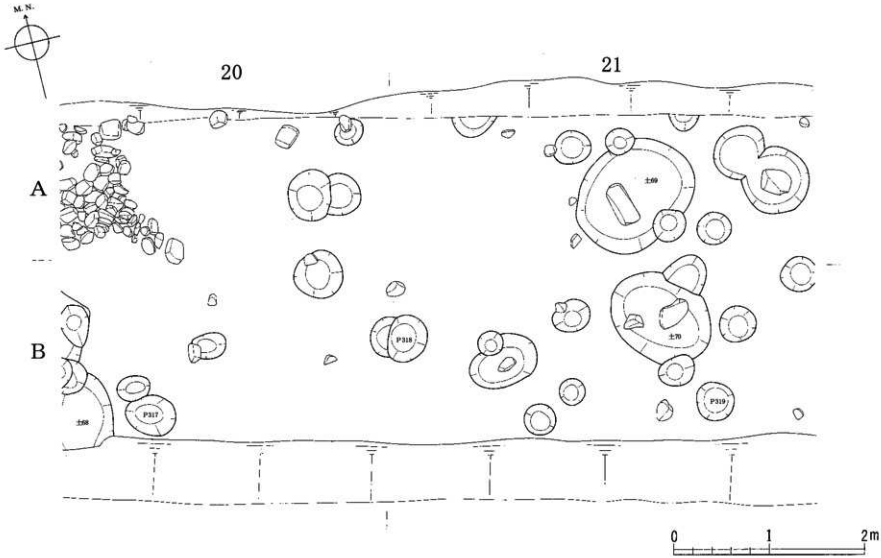
第37図　遺構実測図（9）（縮尺1/40）



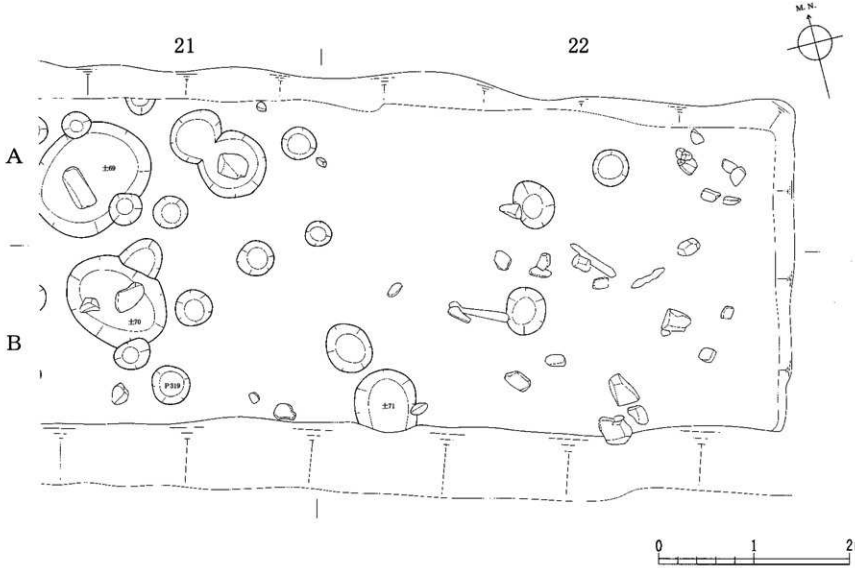
第38図　遺構実測図（10）（縮尺 1/40）



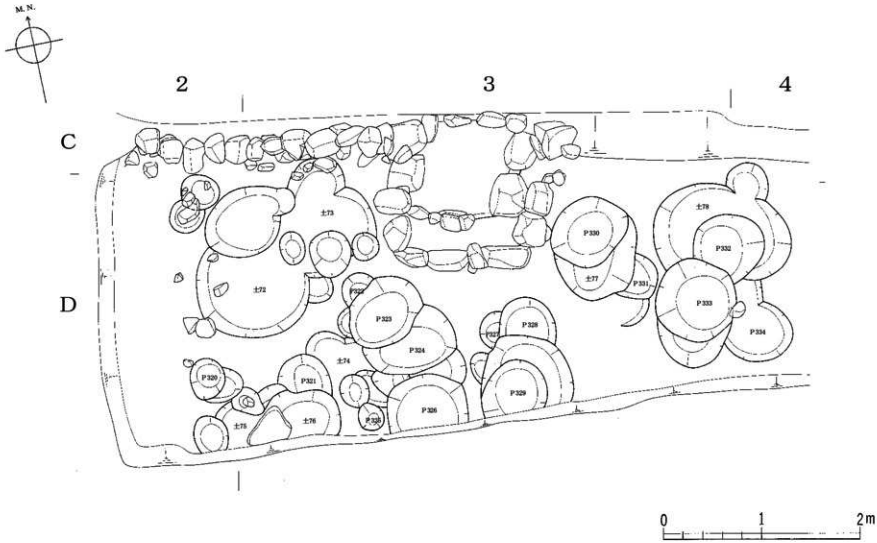
第39図　遺構実測図（11）（縮尺 1/40）



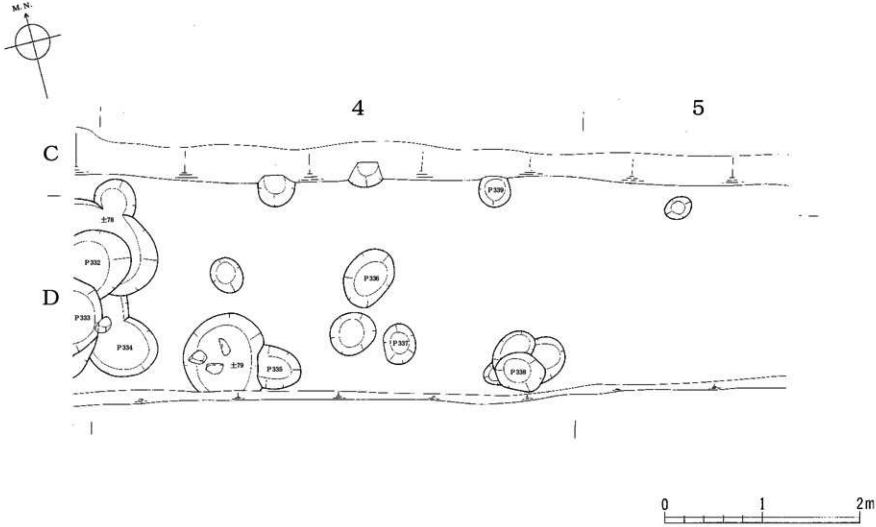
第40図　遺構実測図（12）（縮尺 1/40）



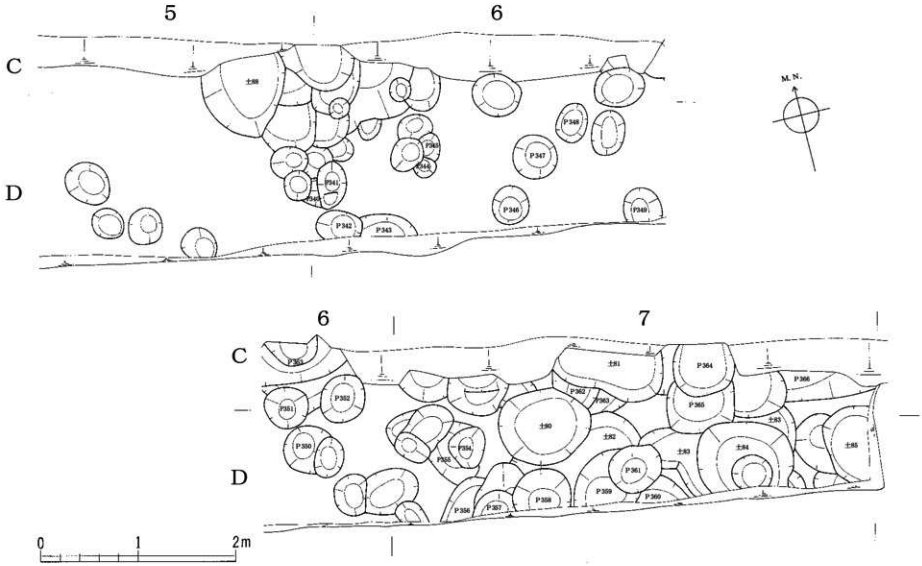
第41図　遺構実測図（13）（縮尺 1/40）



第42図　遺構実測図（14）（縮尺１/40）



第43図　遺構実測図（15）（縮尺 1/40）



第44図　遺構実測図（16）（縮尺１/40）